

中山東路の上、中山路の東側に20i（第二十聯隊）とある。この部隊は十三日午後一時半、中山門に集結した。草場第十九京都旅団長は、松井総司令官の命令通り、配下の第二十聯隊からは第四中隊を選抜部隊として城内に派遣することとした。しかし第四中隊は出発後なかなか連絡が来ないので、通信班長犬飼総一郎氏（まだ存命で、その後「南京戦史」編集委員となり南京事件研究に活躍され、筆者は氏から多くのことを学んだ）に様子の探索を命じた。氏の報告により市街戦はなく第四中隊も無事が確認されたので、十三日夕方第二十聯隊の一部は城内に進入し、宿営した（残り
は城外に駐留）。翌十四日付近を掃討したが、この付近は官庁街であり、皆漢口に移転した後で（三二頁第1図参照）、敵兵も住民もいないので、直ちに城外に移り、城外東方の敗残兵を掃討した。二十日に松井大将の新配置命令が下り、この部隊はさらに東方の大華山方面の警備にあたり、そのまま南京に帰ることなく、一月二十二日北支にむけて転進した。即ちこの第二十聯隊は僅か一昼夜ほど南京の無人地帯に宿営し、掃討を担当しただけで、あとは城外の作戦に従事したのである。但しこの聯隊の第一大隊だけは、十二月二十日の新配置命令で南京城に呼び戻され、師団直属の部隊となった。この第一大隊の中に東史郎がいた。かれはその著『わが南京プラトーン 一召集兵の体験した南京大虐殺』で、自分は南京虐殺を見たというが、ご覧の通り、一般に「南京事件」が最も酷だとされる十二月二十日まで彼は南京にはいなかったのである。その後彼が北支に転進するまでの間に見たという事件は一件だけあるが、その一件も裁判で事実無根であることが証明されている。